

第3章 紀州徳川家の時代



木材と熊野炭



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

紀伊山地の木材

紀伊山地では、昔から良い木材が切り出され、江戸や上方などの市場に出されていました。山地で伐採された木材は、筏に組まれ、紀ノ川や熊野川（新宮川）、日高川などを利用して河口に集められました。

豊臣秀吉は、紀州攻めの後、大坂城や京都の大仏殿（方広寺）の建築用として、熊野の木材を切り出させています。徳川家康も江戸城を修築するときに、諸大名に手伝い普請を命じました。それに先立って、1604（慶長9）年に、紀州藩主の浅野幸長に対し、石垣に使用する石材を運ぶ石船をつくるように命じました。この石船は、熊野川や富田川・日置川・古座川・太田川などの流域の村々や熊野灘沿岸の浦々で532艘つくられました。翌年には江戸城普請の木材が切られて運ばれました。そのために幕府の役人や浅野氏の家臣が熊野地方へ遣わされています。仙台（宮城県）藩主の伊達政宗も、松島の瑞巖寺を再建するとき、熊野から用材を取り寄せました。その建物は現在、国宝となって残っています。

また、1616（元和2）年の江戸城天守閣普請の用材も熊野で切り出して、新宮から運んでいます。2代将軍徳川秀忠の書院や数寄屋の建築用材にも、有田・日高・熊野の松材が使用されています。

紀州藩の山林保護

紀州藩では、クス・カヤ・ケヤキ・スギ・ヒノキ・マツを「六木」と呼び、農民が勝手に切らないように御留山として禁止しました。切るときは藩の許可を受け、切った跡地には必ず植樹することを命じました。

紀州藩の山間の村には山仕事をする人が多く住んでいました。1641（寛永18）年の飢饉をきっかけに、庄主という山林業の事業主へ冬季の飯米として年貢米を貸しつけ、木こりや炭焼きの人の食糧にあてて、賃金の支払い時に差し引勘定をしました。

また藩は、稼ぎの少ない山間へき地の農民を助けるために、御仕入方という役所をつくりました。庄主たちは、それらの役所の許可を受け、資金を借りて木材・板・木炭などの林産物を生産しました。こうした林産物は、各役所が買い上げましたが、農民がそれを運搬して賃かせぎをし、紀州藩は河口などの港から江戸や大坂へ送り出して、販売の利益をあげました。

熊野炭・備長炭

「熊野炭」と呼ばれる木炭は、江戸では紀州みかんより有名であったといわれています。熊野の山々に自生しているウバメガシやカシを炭窯で焼いてつくる白炭です。焼かれた炭は川船で新宮川を下り、新宮まで運ばれました。紀州本藩領の炭は新宮の宮戸御仕入方、新宮領の炭は池田御役所が取り扱い、江戸市場の炭の値段をみながら廻船で江戸へ送りました。広い熊野地方の各地の山々では、焼主から金銭や米麦を



熊野川河口の川船（1935年ごろ）



新宮の川原町（昭和のはじめごろ）

借りた焼子が炭窯を設けて炭を焼き、手にする賃金^{ちんぎん}で返済した。その炭を運ぶ人夫が熊野川の船着場まで遠い山道を運び出して川船へ積み込みました。生活のきびしい熊野の山村では、熊野炭の生産が人々の生活をうるおしました。

田辺あたりで備長炭^{びんちょうたん}という炭があります。初めてつくった人はわかっていませんが、秋津川（田辺市）あたりの炭焼きだったのではないかとされています。その炭を備中屋長左衛門という商人が「備長」の名前で販売して、品質が^{こうりよう}良いので好評を得たと伝わっています。炭の材料、焼き方ともに熊野炭と同じであると考えられます。

日高郡や熊野地方の本藩領で生産する炭は、御仕入方を通して販売されました。

新宮では、熊野川の河原^{かわら}に1945（昭和20）年ごろまで川原町がありました。宿屋・ふろや・食堂のほか、いろいろな店が並んでいました。筏師^{いかだし}や林産物をあつかう商人たちが利用しました。建物は組立て式で大水が出ると避難しやすいようにしていました。江戸時代の記録にも、このような川原町があったことが記^{しる}されています。



わかやまの知識



【新宮城内の炭納屋群】

江戸時代の新宮は、太平洋側の航路^{かうろ}にとって非常に重要な位置にありました。そのため、新宮城内には立派な港がつくられていました。このあたりを発掘調査したところ、古文書に記された「炭納屋」が多数建てられていた跡が見つかりました。

この地方特産^{じょうしつ}の上質の熊野炭は江戸で高く売れたため、新宮の領主水野氏は「炭納屋」を熊野川の川沿いに建てて貯えていたようです。しかし、城内の港近くにまで炭納屋が建てられていたとは想像もつかないことでした。

1854（安政元）年の大地震で城が大被害を受けたときも、城の石垣よりも、城内の炭納屋群がいち早く修理されています。熊野炭の販売による利益が大きかったため、水野氏が炭納屋をたいへん重視していたことがわかります。



炭納屋跡

* 1 第1編 第3章「熊野の山のめぐみ」60ページ参照。